遊方考（一）

大西龍峯

はじめに

旅行は、現代人にとっては、別に珍しいことではない。ごく日常的で、すでに生活の一部であり、誰もが楽しめる手軽な娯楽となっている。実のところ、一生の間に一度も旅行したことのない人を見つける方が、はるかに難しいくらいであろう。

しかし、こうした旅行の普及は、人間の歴史においては、きわめて新しい出来事である。

仏教の伝導が盛んに行われた六朝期の中国でも、旅は、決して楽しみといえることではなかった。道路も良くなかったし、治安も良くなかった。そして遠い旅であればあるほど、不便も苦難も危険も大きくなった。そのため、よほど必要に迫られなければ、わざわざ住み慣れた土地を離れて、長いあいだ旅をしようとする者などいなかったのである。

それにもかかわらず、僧侶はよく旅をした。生還を期しがたいような旅を企図する者さえ、かなりいたようである。求法伝導のためとはいえ、彼らが旅に寄せる熱意は、尋常なものではなかった。

こうした旅への熱意を、『梁高僧伝』では、「遊方の志」と称している。本稿では、これがいったいどういうものであり、また中国の知識人の考え方や生活に、どんな変化をもたらすことになったかについて考察してみたいと思う。

一、六朝期の旅

まずは、当時の人が、旅についてどう考えていたかを見ておくことにしよう。

道に在りては諸悪多し。（『梁高僧伝』巻六・大五〇・三六一上）

見知らぬ土地を行くわけだから、予期しない障害にぶつかることが多い。口にした食べ物や飲み物で病気になってしま

うこともあるし、風雨の際に雨宿りする場所が見つからなかったり、暑さ寒さにさらされて、しのぎようもない場合もある。

だいたい中途に通り過ぎる山にも森にも、未知の世界が大きくひろがっており、たいていの人にとって、そうした未知の世界は、好奇心をそそる場所などではなく、どちらかといえば、暗く恐ろしい神秘的な場所であり、敬して遠ざけるべきものと考えられていた。飢えた虎や狼がいるし、信じられないほど大きな蛇が出没するし、さらにはまがまがしい鬼神妖怪も徘徊しているのである。(1)

たとえば『搜神記』には、

蜀中の西南、高山の上に、物有り。猴と相類す。長七尺。能く人行を作し、善く走りて人を逐う。（巻一二）

臨川の間の諸山に、妖物有り。来たるときは常に大風雨に因り、声有り嘯くが如し。能く人を射る。（同上）

といったように、あちこちの山に、人とも動物ともつかない妙なものがうろついており、道行く人を追いかけ回したり、あるいは弓矢を放ったりと、悪さをすると信じられていた。

また町や村にたどり着けないまま、日が暮れてしまい、しかたなく夜道を辿る事態も、ときに生ずるのであるが、そんな際には、当然ながら幽霊や魔物に遭遇しやすい。

南陽の宋定伯、年少の時、夜行して鬼に逢う。（巻一六）

頓丘の界、人有り、騎馬もて夜行す。道中を見るに一物有り、大きさ兎の如し。両眼は鏡の如く、馬前に跳躍し、前むことを得ざらしむ。（巻一七）

しかも魔物は、山林や夜道ばかりでなく、旅行の便宜のために街道筋に設けられた旅館（駅亭）にも、棲みついていた。

汝南汝陽の西門亭に、鬼魅有り。賓客止宿すれば、輒ち死亡すること有り。（巻一六）

南陽の西郊に一亭有り。人、止まることを得ず。止まれば即ち禍有り。……夜半に至りし時、忽ち鬼有りて来たる。（巻一八）

長旅をすれば、当然ながらこうした旅館を利用する必要度も大きくなる筈だが、泊まれば災いがあると噂されるものが少なからずあったのである。変な噂が立つくらいであるから、これらの旅館は、見るからに荒れはてて、うす気味の悪い雰囲気をしていたにちがいない。とはいえ、旅行で一番恐いのは、やはりなんといっても盗賊であったようである。

呉の人、費季、久しく楚に客す。時に道に劫多し。妻常に之を憂う。(2)（巻一七）

見られるように、夫が旅に出ているあいだ、家に残った妻が最も心配したことは、追い剝ぎ窃盗に逢うことである。ことほどさように当時は盗賊が多かったのであり、(3)旅人はよく襲われたのである。襲われると、所持品から着ているものまで身ぐるみ剝がれ、あげく殺されることもあるし、奴隷とし

て売りとばされてしまうこともしばしばであった。

一般に盗賊というと、官憲に負われているアウトローだとか無宿人だとかを考えやすいけれども、（戦乱に明け暮れる当時はそういう人々も多かったが）実際には食べる物も充分ではない山間の貧しい村などは、機会さえあれば、いつでも盗賊に変貌し追い剝ぎを行ったのである。

山に荒民多く、俗草竊を好む。（『梁高僧伝』巻三・大五〇・三四〇上）

つまり道々通過する一見なんの変哲もない村の人々が、いつなんどき盗賊に変るかもしれないのである。貧しい人々だけでなく、王侯貴族にしても、やはり油断がならない。彼らは贅沢を維持する費用や戦費など、いくらあっても足りないほど資金を必要としていたから、これを捻出するために、官位を売ったり墓荒しをしたりするほか、ときに奴隷狩りをして、その調達をはかることがあった。後趙の石勒も若い頃、飢饉と戦乱の中で流寓の生活をしていて、こうした奴隷狩りにあい、売りとばされたことがある。(5)

僧侶の中にも、慧安のように、奴隷だった前歴をもつ者がいる。

少くして虜せられるを経て、荊州の人に属い、奴と為る。役を執ること懃緊なり。主甚だ之を愛す。年十八にして出家を聴さる。（『梁高僧伝』巻一〇・大五〇・三九三上）

この人の場合は、熱心に仕事をして主人に愛されたので、結局十八歳の時に出家を許され、自由の身となることができた。

たとえ郷里にいても安易に一人歩きなどしていると、いつ人さらいに出くわすかわからない、そんな危ない世の中であった。旅に出れば、なおさらである。

そして情け容赦のない盗賊たちは、求法の旅をしている僧侶だからといって、見逃してくれたりはしなかった。慧叡は、まさにそうしたとんでもない災難に逢ったひとりである。(6)

常に遊方して経を学び、蜀の西界に行き、人のために抄掠され、常に羊を牧せしめる。（同上巻七・大五〇・三六七上中）

なんと彼は異境の地で、羊飼いにされてしまったのである。しかし読み書きはもとより、たいへん知識のある羊飼いであったから、後に仏教の知識を有する商人がたまたま通りかかると、すぐにその難をさとり、お金を出して奴隷の境遇から救い出してもらうことができた。もちろん、これは運が良かったのであり、さほど運の良くなかった僧侶も結構いたであろうことは想像に難くない。

二、商胡

ともかく、ひとり旅はあまりに危険が大きいので、旅行に際しては同志を集めたり、同じ道を行く商人に随伴したりし

て、できるだけ人数を多くするのは常識であった。

だいたい「旅」は、「侶」に通じ、仲間を作ることであり、また「旅」字の成立ちも旗の下に人が集まることを言う。つまり旅行というのは、もともと一人でするものではなく、連れだってするものと考えられていたのである。

此（泰山西北）の谷中、旧くより虎災多し。常に杖を執り、群を結んで行く。（大五〇・三五四中）

人数が多ければ、盗賊も野獣もおいそれとは襲ってこないし、何か事故が発生した場合も、助けあうことができた。しかし、未知の土地を旅する場合には、人数が多ければそれで充分ということではなかった。土地の不案内から道に迷ったり、独特の習慣を知らないために困惑したりといったこともあるわけで、その点、各地の地理や風俗習慣に通じ、かつは旅慣れた商人と同行することによって、無知から生ずるトラブルをできるだけ避ける必要があった。

法顕の伝記をみると、「商客に寄附して、獅子国に到る」とか、「商人の大船に附し、海に循いて還る」とか、「他商に随いて、東のかた広州に適く」といった記述がみられ、しばしば商人の一行に身を寄せて旅をしたことがわかる。これは一緒にインドへ向かった僧侶が、あるいは死に、あるいはインドにとどまるなどのことがあって、中国への帰路が一人になってしまったせいもある。しかし、それ以上に商人とともに旅をすることの便宜に気づいたためでもあったろう。

もちろん外国の旅ばかりでなく、中国国内でも、僧侶は商人に同行することがあった。安世高は洛陽が戦乱の巷となり、江南へ向かったが、そのときは、「高の同旅三十余船」(7)（三二三下）とあり、やはり商人と旅をしている。三十余船というから、かなりの荷物と人数を抱えた一団である。おそらく彼らは、当時さかんに活動していた西域の商人であったと思われる。

賈胡、商胡と呼ばれたこうした西域の商人たちは、後漢の光武帝の時代から、相当数中国にやってきていた模様である。たとえば伏波将軍馬援が夷狄征伐に下った際、その行軍があまりに遅々として進まず、従軍した武官の一人が兄に宛てた手紙の中で、これを嘆いて

伏波は西域の賈胡に類す。一処に到ればすなわち止まり、是を以て利を失う。（『後漢書』巻二十四「馬援伝」）

と述べていることでも窺えよう。馬援の行軍の仕方は、まるで西域の商人みたいで、村や町があるたびに止まってしまい、軍事的にみてあまりに拙劣である、というのである。この記述から、村や町があると、そこにとどまって店開きをし、商売を始める西域の商人の姿が、中国の人々の耳目に、しばしば触れていたことが知られるであろう。そして安世高が訳経を行った時代になると、皇帝であった霊帝からして、

西域趣味のたいへんな傾倒者となっていた。

霊帝は、胡服、胡帳、胡牀、胡坐、胡飯、胡空侯、胡笛、胡舞を好む。京都の貴戚、皆競いて之を為す。(『後漢書』五行志一)

このように、霊帝は西域の文物なら何でも喜んで取り入れたのであり、都の王侯貴族もこれに倣って、もてはやしたのである。当然ながら西域の商人の活動も、これによって大いに展開されたはずである。おそらくこれらの西域の商人たちこそ、僧侶の旅に多大な援助や協力をし、さまざまな土地の情報をもたらし、旅への情熱をかき立てた張本人であったにちがいない。

(未完)

注

(1) 魏晋から南北朝にかけて著された地誌の多くは、さまざまな怪異を記した博物志といった内容であり(藪内清「中世科学技術史序説」東方学報京都第三十二冊・昭和三十七年)、南州異物志、涼州異物志、扶南異物志など、異物のみを対象にした、独特の傾向をもった地理書も作られた(森野繁夫「任昉述異記について」中国文学報第十三冊・昭和三十五年)。それだけ未知の土地は、あやしげな物で満ちていると想像されたのである。

(2) この記事は、『録異伝』にも収録されているが、そこでは費季が行商人であったとされている。当時の主要な旅人は、とりもなおさずこうした行商人であったと思われるが、さまざまな不便や危険にもかかわらず、彼らが敢えて行商に従事したのは、うまくいけば一獲千金の夢をかなえることができたからである。例えば陸験という人は、もともと貧乏であったが、同郷の人から米と銭を借りて商売をし、ついに千金の富を得たのである。さらに彼はこれをもとでに都に出て要路に金をばらまき、政府の要職につき、やがて富と権力をも手中にしたと言われる(『南史』巻七十七「恩倖伝」)。皇帝の側近となり権力を振るったこうした恩倖たちには、陸験のように、いわば一代でのし上がった商人の出身者が多かったようである。実際『宋書』『斉書』『南史』の恩倖伝に列伝される人物に、商人出身者が多かったことは、唐長孺『魏晋南北朝史論叢続編』(一〇五頁)に指摘がなされている。

(3) 戦乱の際には、軍隊は敵地の田畑を焼き払ったし、領地の農民からは平時以上の食糧を徴集し、また労役にも駆り出すので、農民は仕事に専念できず、流離し、村は荒廃し、生活に困った人々は盗賊となって群行したのである。

(4) 『搜神記』巻十五には、墓あらしを好んだ王侯や、城の修築に必要な物資の調達のためにたくさんの墓をあばいた将軍の記事が出ている。

(5) 『晋書』巻一〇四「石勒伝」。晋の皇族であった司馬騰は当時の幷州刺史の進言を受けて、胡人の集落を襲って奴隷とし、売りさばいて軍費にあてたのである。奴隷狩りの対象とされたのは石勒のような異民族が多かったようであるが、しかし漢民族であっても決して安心してはいられなかった。

(6) この慧叡が僧叡と同一人物であろうことは、横超慧日「僧叡と慧叡は同人なり」(東方学報東京第十三冊の二・昭和十七年)に論じられている。ただし、奴隷として売られた点に

ついては何の考察もされていない。

(7) 安世高のこのときの「同旅」が商人であることは、この前文に「商旅」の語あることによって知られる。

また『梁高僧伝』巻十「慧安伝」にも、「商人に附して湘川に入る」（大五〇・三九三中）の記述がある。特に示されていない場合でも、僧侶が商人の道連れとなって旅をすることは、ごく一般的であったにちがいない。